

大学院臨床心理学専修パラオ実習報告

玉瀬 耕治・宮川 治樹
神澤 創・奥村 玲香

この報告書は、2008年1月6日から11日にかけてパラオ共和国ドルフィンズ・パシフィックで行われた帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻臨床心理学専修の海外実習に関するものである。この実習は、当専修における臨床心理実習の一環として企画された。帝塚山大学では心理福祉学部が開設された当初より、学部における特色ある授業科目としてアドベンチャーカウンセリング (Fletcher & Hinkle, 2002; Schoel, Prouty, & Radcliff, 1989) が開講され、その成果が報告されている (小西, 2005, 2006, 2007; 松岡・小西, 2006)。また、それに関連したイルカを中心とする動物介在活動についても実績があげられている (宮川, 2005, 2006)。大学院臨床心理学専修においても体験活動が重視され、修士論文のテーマとして発達障害児へのイルカ介在活動の有効性を示唆する研究も報告されている (植田・宮川, 2007)。このように、本学の大学院教育では単に臨床心理学に関する専門的な知識・技能を身につけさせることのみならず、幅広いさまざまな体験を通して実際に地域社会で役に立つ実践的な臨床家を養成することが重視されているといえる。

このような経緯をふまえて、帝塚山大学では学部と大学院を含めて安定的に動物介在活動や自然体験活動を行うことが可能となるように、パラオ共和国NPO法人Dolphins Pacificとの間で「イルカ介在活動に関する協定書」が交わされている (2007年9月23日締結)。今回のパラオ実習は大学院生を対象とする初めての試みであり、その成果の如何が問われているものである。以下に報告するように、今回の実習を通して学生たちは大学の中では味わうことのできない多くの体験をし、自然と触れ合うことの大切さや動物と接することの意義を肌で感じていることが分かる。その意義はきわめて大きいといえよう。

パラオの概要

パラオ共和国はミクロネシアに属し、日本から真南へ約3000km下ったところに位置する人口約2万人の島嶼国である。その大部分は珊瑚礁によって形成されている。第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけては日本による占領・統治下に置かれていた国であり、日本との関係は深い (森岡, 2006)。第二次大戦後はアメリカを施政権者とする国連信託統治領となり、1994年に自由連合国として独立した (パラオ政府観光局ホームページ, 2008; 地球の歩き方, 2007)。

実習の概要

参加者：教員4名（奥村玲香、神澤創、玉瀬耕治、宮川治樹）、大学院生9名（小畑周介、奥野朝子、大宅洋行、川口智子、河越隼人、澤田幸嗣、塩野由乃、田中和美、牧野祥子）の合計13名。

実習の企画・進行とドルフィンズ・パシフィックとの連絡調整は宮川治樹チーフディレクターによって行われた。また、奥村玲香は通訳と全般にわたる庶務・会計を担当した。

日程は次のとおりであった。

1月6日（日）

関西国際空港（20時10分発）よりパラオ国際空港（0時15分着）へ
マラカルビーチサイドホテル泊（5泊）

1月7日（月）

①ベラウ国立病院見学 ②元副大統領との懇談会・昼食会 ③刑務所ギフトショップ見学
④パラオ・コミュニティカレッジ視察 ⑤ベラウ国立博物館見学 ⑥夕食会

1月8日（木）

ドルフィンズ・パシフィックにて研修

①ドルフィン・クローズエンカウンター ②ドルフィン・シンフォニー
夕食会

1月9日（水）

オーシャン・カヤック・ツアー

①ジャパニーズ・ケープ（ゼロ戦） ②ストーンマナー ③シュノーケリング
夕食会

1月10日（木）

ドルフィンズ・パシフィックによる特別企画ツアー

①ミルキーウェイ ②ロングビーチ ③オモカン島の南側 ④ジェリーフィッシュ・レイク
⑤シュノーケリング
ショッピング（WCTCショッピングセンター）、夕食会

1月11日（金）

パラオ国際空港（3時50分発）より関西国際空港（7時40分着）へ

研修の成果について

(1) 元副大統領の熱い思い

初日のスケジュールはベラウ国立病院の見学から始まった（ベラウはパラオの現地名）。各科外来の様子を見学し、リハビリテーション科や精神科で話を聞いた。その後、ペントハウスホテルの一室で元副大統領サンドラ・ペイラントツジ女史（写真前列左端）の歓迎を受けた。女史はあらかじめ原稿を用意され、パラオの国情（財政）、保健衛生、教育事情、自然保護と観光産業、国の将来への思いなどについて、力を込めて話された。とりわけ女史はマイクロネシアチャレンジ

について触れ、2020年までに少なくとも国の30%の近海資源と20%の森林資源を効果的に保護することになっている(2006年3月、5カ国が調印)と話された。その後現地料理の昼食をいただき、さらに女史の講演は続いた。最後に参加者一人ひとりと意見を交わされ、質問にも答えていただいた。パラオの子どもたちの将来を思う気持ちから感きわまって涙を浮かべられる場面もあり、その熱い思いはわれわれを強く感動させるものであった。この講演については翌日現地の新聞に大きく報道された(写真)。その後、コロール刑務所のギフトショップを見学し、さらにコミュニティカレッジを視察して第一日目の行程を終えた。



Psychology students from Japan visit Palau

BY AUREA A. GERUNDIO
Reporter

Nine graduate students and four faculty members of the Clinical Psychology Department of Tezukayama University in Nara, Japan are here in Palau for a four-day study tour.

Professor Koji Tamase led the delegation during a visit to the Belau National Hospital yesterday morning.

The delegation also had a luncheon meeting with former Vice President Sandra Peirantozzi at the conference room of Penthouse Hotel.

Peirantozzi, who is a former minister of Health, briefed the delegation about

Palau. She informed the visitors that tourism plays a key role in Palau's development.

She was teary-eyed when she talked about how Palauan citizens treasure and give importance to its environment.

She explained that the Palau government imposed laws to protect and preserve its pristine environment.

After the luncheon meeting with Peirantozzi, the delegation visited the inmates at the Koror State jail then went to the Belau National Museum and the Palau Community College.

Today, the delegation will spend the entire day at the Dolphins Pacific for the "feel dolphin activity."

Tamase told reporters that their visit to Palau aims to foster mutual understanding and friendship under the agreement between Palau Dolphins Pacific and Tezukayama University.

The agreement includes a private program for "guests who has developmental disorders and need time to become accustomed to the environment and dolphins."

The program is not a dolphin assisted therapy tailored for treatment. It is a program that provides opportunities for guests to enjoy with the dolphins at their own pace in the natural surroundings of the Rock Islands.

On Thursday, the delegation will go on a Rock Islands tour. They will leave on Friday to Japan.

(2) ドルフィンズ・パシフィックでの成果



第二日目はドルフィンズ・パシフィックでの研修であった。パラオ政府が認可するイルカの研究施設であるドルフィンズ・パシフィック(2001年開設)は世界最大規模のものであり、コロール島に隣接する小島の一角に設けられている。ここでは8頭のイルカが2頭ずつごく自然な形で飼育されている。トレーナーはイルカの生態を研究し、無理のない形でさまざまな行動を学習させている。その原理は心理学の行動理論に基づくものであり(Fuji & Watson, 2006)、われわれは訓練の方法を具体的な事例(クリッカーゲーム)で学ぶことができた。この方法は障害児の指導に適用されているものと原理的には同じであり、学生達にとってもなじみやすいものであった。われわれはイルカと触れ合い、わずかなサインでイルカに指示を出し(ジャンプ、ダンス、挨拶など)、イルカと遊ぶことができた。イルカが食べる4種類の小魚の管理には細心の注意が払われており、



毎日の飼育はかなりハードな作業であることが理解できた。

(3) 自然との触れ合い

パラオは珊瑚礁に囲まれた小さな島国である。この国には586の島があり、そのうちのわずか9島だけに人が住んでいると言われている。さらにこのうちの4島だけが火山島であり、残りの島々は石灰岩でできている。石灰岩島はどの島も海面近くの岩が侵食され、きのこ型になっている。第三日目はオーシャン・カヤック・ツアーに参加し、もっぱら自然との触れ合いを楽しんだ。2人ずつ組んでカヤックをこぎながら、自然保護や環境問題に詳しい専門家のガイドによって、植物のこと、鳥のこと、海に沈んだ戦闘機のこと、めずらしいストーンマネーのことなどを教えられた。シュノーケルをつけて海に入り、めずらしい珊瑚や美しい熱帯魚をながめながら、自然の美しさにしばし時を忘れた。



第四日目は、ドルフィンズ・パシフィックの特別企画によるツアーであった。副所長のキャロル・ンギライディスさんとスタッフの根津美保さんに同行していただき、高速ボートで遠方まで出かけた。ミルクウエイ、ロングビーチ、ジェリーフィッシュ・レイクなどのめずらしい場所に案内され、誰もが子どもに帰り我を忘れて楽しんだ。

(4) 学生同士、教員同士、現地スタッフ・学生・教員の交流の深まり

この研修を意義づけているものは数々あるが、大きな成果の一つは日常の触れ合いでは体験できないようなチーム全体の一体感が得られたことではないだろうか。毎日の終わりにいろんなレストランへ夕食に出かけ、学生同士、教員同士、学生と教員、そして時には現地スタッフも交えて食事を楽しみながらその日の出来事やとりとめのない雑談をかわし、笑うことによって、日常では得がたい時間を共有できたことである。この体験はきわめて有意義で貴重なものであった。

(5) 冒険的な新しい体験をしたことの意義

今回のツアーではそれほど危険な要素はなかったが、それでもワイルドな体験という意味では申し分のないものであった。それは、木の茂った岩山の中に分け入ったり、降りしきる雨の中を高速ボートでずぶぬれになりながら走ったり、カヤックを操ったり、美しい珊瑚の間を悠然と泳ぐ魚たちをシュノーケルでながめたりしたことである。とりわけ奇妙な体験は、ジェリーフィッシュレイクでのくらげの大群とのたわむれであろうか。

(6) 異なる国の歴史と文化への興味と関心

われわれ一行のほとんどにとって、パラオを訪れたのは初めてのことである。また、ミクロネ

シアという海洋国家がどのような歴史と文化をもっているのかについてもほとんど無知であった。今回の実習は、他国の歴史と文化を学ぶ絶好のチャンスとなった。元副大統領の講演は、その意味でかなり役立つものであった。われわれ教員が最後の夜にお会いした磯川禮子氏は、戦争中の日本軍の現地での様子を詳細に語ることでできるきわめて希な方である（磯川，2005）。国際協力機構（JICA）のホームページを開いてみると、多くの日本人がパラオの発展にかかわってきており、われわれを案内してくれた人たちの中にも大勢その関係者が含まれていたことが分かる。このような交流を続ける際には、パラオというひとつの国にとどまらずミクロネシア、メラネシア、ポリネシアなどのより広い環太平洋の国々に目を向けて、異質な文化から多くのことを学ぶ必要があるだろう（国立民族博物館，2007；内田，2007）。

参加学生による感想

帰国の際に参加学生には、実習についての感想を求めるレポートを課した。提出されたレポートはかなりの分量であり、ここにすべてを掲載することはできないが、それらの一部を抜粋して、以下に紹介する。

1) 小畑周介君のレポートより

新鮮だったパラオ実習 今回のパラオ実習は私にとって、2つの点でとても新鮮なものとなった。まず、パラオのような南の島に出かけるのが今回初めてだったこと。海で泳いだ体験も多くなかったのも、透き通る青い海を見ているだけでとても気分が明るくなった。それから同期の仲間達と5日間生活をともにするという。海外に仲間と出かけることがあまりなかったので、院生9名と先生方で行く今回のツアーは賑やかで楽しいものとなった。特に大勢での夕食は楽しい時間だった。

イルカの弁当箱 イルカが食べるのはサバ、シシャモ、イワシ、ニシンの4種類。クーラーボックスにそれぞれ決められた量の魚を詰めていく。イルカ達はデリケートで病気になりやすいので、悪い魚を選別しながら細菌が入らないように手際よく作業をしなければならない。食欲旺盛なイルカ達は毎日12kg以上も食べる。一日欠かさずやらないといけない大変な作業だ。

イルカの目 やっぱりイルカは魚とは全然違う。泳ぎながら横目でこちらを見るあの目が違う。水の中にいるのだから当然だが、うるんだような優しい目がなんかしゃべりかけてきそうな感じ。好奇心旺盛でサービス精神旺盛にも見える。ジャンプの後にす〜っと水面を泳ぎながら「ウケた、ウケた」って思っている感じ。やっぱりあの目はなにかを話しかけ、なにかを考えていると思う。

クリッカーゲーム イルカにどうやってジャンプなどの技を教えるのか？それを人間でやってみるのがクリッカーゲーム。音を手がかりにしながら、なにかいい動作でなにか違うのか探っていく。確かに忘年会に上司に土下座させたりするにはちょうどいい。他にどんな場面で応用できるか、いろいろ考えてみるのも面白い。

イルカの背びれにつかまって イルカのプールに入り、大接近。触った感触はやはり巨大なすび。人の間をすり抜けるようにゆっくり泳ぐイルカ達。デモンストレーションで見せてくれた泳

ぎはやはり高速。特にジャンプの時に深いところから水面に向かって泳ぐ様は迫力満点だった。最後にイルカの背びれに掴まって引っ張ってもらう体験には雨の中にも関わらず、メンバーみんなが大興奮。

2) 奥野朝子さんのレポートより

教育プログラム アメリカが主導で行っている3年のプログラムであり、2008年8月に終了予定。人が集まる公立の病院で行われており、対象は0～8歳程度。概要を説明してくれた日本人の中川さんがプログラムスタッフの一人として、参加されている。現地では教育への関心が低いいため、2007年1月より啓発活動のため、各島を回り、行っている。プログラムのスタッフは、本業と兼任で行っているため、病院が中心となり行っている。

就学状況 小学校へは多くが入学するが、小1・小2頃に中退する者も多い。勉強ができて、就職の保証がないため、保護者も漁や畑仕事ができる方がよいと考えている。学校は8～14時で、給食の提供がある。日本人教師も多くいる。学校では、教科書も英語が使用される。子ども達は、就学前まではパラオ語を聞いて育つ。しかし、近年、英語の番組がテレビで放送されるため、就学前から、英語に触れている。(テレビは、あまり番組は充実していない。)

教育機関 公立の高校、大学は1校ずつある。しかし、専門性の高い資格制度がないため、フィジーなど他国へさらに進学するものも多い。(特に医療関係)

出生・死亡 出産は病院で行うが、その後すぐに退院する。(出生は年間約220人) 死亡は年間170人。基本、土葬で行う(信仰は、キリスト教が多いため)。病院の霊安室に死亡後3～4週間保管した後、葬儀が行われる。霊安室では、家族の方が、別れを言うために訪れていた。霊安室の使用は、1日当たり80ドルかかる。

医療関係 ①精神科病棟 行動変容を主に行っている。パラオの自殺は若年層が多く、理由は習慣による枠に対する苦しみや就職困難など。11・12月は自殺率が高くなる。病棟はベット数全9床(男性3床、女性3床、その他3床)。18～80歳が入院。統合失調症の発症率は日本の3倍。治療は、主に薬物療法(SSRIなどジェネリック薬品)、電気によるもの。ADHDの治療もこの病棟で行う。

②OTプログラム 容態が良くなると、クリーニングやカービング(木彫り)などのプログラムが週3回(月・火・金)行われる。

3) 大宅洋行君のレポートより

イルカ教育施設 私はイルカ介在療法については何となく知識としてあったのですが、実際にイルカをこれ程までに近くで見つめ・触れ合ったことは初めてでしたので、どれもが新鮮な体験でした。

イルカと共に泳ぎ軽く手を出すとそこにイルカが来てくれるという体験をさせてもらったとき、始め私は正直少し怖いな一と思いました。しかし、こちらが怖いと感じているとイルカは近寄って来ず、緊張して手を伸ばしていてもイルカは来てくれず、少しずつ自分からイルカに近寄って

自分がイルカに慣れてきてから手を伸ばしてみるとイルカは近寄ってきてくれたように思います。子どもの場合どのように初めてのイルカと接するのかということに少し興味を抱き、またイルカ介在療法の中でいわゆる発達障害児などはこういった力の抜き具合のようなものを感じ取って学習していくのかなぁとも感じました。またイルカ介在療法の参考書などの中でどのように考えられているのか少し学ぼうと思います。

また、もうひとつ非常に興味を寄せていた事柄にイルカの調教がありその点を学べ、とても嬉しく思いました。イルカの調教も行動理論の応用を行い巧みな技も一つなぎのチェーンで作られているという方法を分かりやすく解説していただき勉強になりました。ジャンプの方法、高さを出すための方法などだけでなく、人がイルカに触れることや注射を行う際などとても局所的な行動についても一つ一つ強化されることにより可能となっているという点で感心しました。

イルカと人間の共生をし、教育に用いていくには様々な苦労がなされていることも知り得ました。しかし、おいどん（アダチ）さんの見つめるイルカへの目線から本当にこの人はイルカが好きなんだなぁと思いましたし、自分自身イルカの目を見ているとなんともなく愛嬌のある瞳で、イルカ施設を出るときにはとても寂しくなり、また機会があればイルカと触れ合いたいと思いました。

4) 川口智子さんのレポートより

カヤックツアー カヤックを漕ぎながらマングローブの間を通り、パラオの自然と歴史を体感した。またロックアイランドの中を歩いて直径3mもの石貨を見に行った。日本では博物館に展示されてしまいそうな歴史的な産物も、パラオではそのままの状態に残されていた。大自然に人工物のゼロ戦が沈んでいるのを見て、少し恐怖感が襲ってきた。ガイドの方もなかなか遭遇しないという国鳥（ビーヴ）も見ることができた。その後珊瑚礁が見えるスポットでシュノーケリングをし、テレビや図鑑で見ると鮮やかな魚が泳いでいるのを見て気持ちが高ぶった。

感想 この数日で非日常を体験できたと思う。パラオは日本との繋がりがあり、日本語が通じやすい国ではあったが、海外ということで、言葉も英語やパラオ語、日本とは違う気候、風景、文化を体験して、個人的に縮こまった視野が広がったと感じた。この「視野が広がる」という体験が私としてはとても大切なことだと感じている。小さな物事に意識がとられていたり、固まった考え方に囚われてしまっていると、柔軟性がなくなり、問題や解決法、大事なものを見失ってしまうもので、「視野が広がる」こと、さらにそこから「視点が変わる」ことは、単純なストレス解消だけでなく、各個人が抱える問題の解決を根本的に助けることに繋がっていくこともあるからである。実際、意識はしていなかったが、昔私自身就労していたときはストレスが溜まった時は、遠くに出掛けてみたり、未体験のことに挑戦してみたりと刺激を求めているように思う。気分転換から得るものは多い。

普段「○○しなければならない」とか「○○でなければならない」といった考えで自分自身を縛り付けていた事実を実感し、大声を出して笑ったり、不思議な体験を「いい、悪い」で判断するのでなく、「好き、嫌い」「気持ちいい、気持ち悪い」といった感覚で体験できたりと、自分に素直で正直になれた数日間だったので、こういった機会をいただいたことにとても感謝したい。

5) 河越隼人君のレポートより

初日 パラオの病院見学をさせていただいた。そこでは日本人スタッフも数多く働いており、医療に関するだけでなく、パラオの教育事情などにも携わっていた。パラオはまだまだ発展途上であり、経済事情などから学校を中退する子どもも多い。日本でみられるような、不登校といった問題は無いようである。経済や環境の発展によって生まれてくる精神的な問題というものも少なくないのであろう。しかし、そういったこととは関係なく、統合失調症などの精神障害を抱える人はいる。このような人たちを支えるためにも、日本からの支援は重要であろうと感じた。

亡くなった人の安置についても話していただいた。パラオでは亡骸を長期間保存しておくために、冷凍する手段をとっているようであったが、これにはかなりの金額がかかるとのことであった。亡骸の防腐処理を行うエンバーミングといった技術は、パラオのような国でも有効に使えるのではないだろうか。

昼食はパラオ前副大統領のサンドラさんと会食であった。その中でもパラオの環境保護に対する話には心を打たれた。旅行者が増えることで環境が著しく破壊されてしまうこともあるが、旅行者を受け入れなくては経済が不安定になってしまうこともある。旅行者のモラルを高め、パラオの素晴らしい環境を守り続けてほしいと心から願う。

2日目 Dolphins PacificのOne Day Trainers Programに参加させていただいた。間近でイルカに触れるのは初めての体験であったが、今までに経験したことのないような感動を覚えた。トレーナーの方たちも、イルカのことを一番に考え、心優しい人たちばかりであった。

イルカのトレーニングでは、条件づけの理論が応用されており、心理学と密接な関係にあると感じた。実際に、よくトレーニングされたイルカの行動を目の当たりにすると、強化による学習の効果が驚きを隠せなかった。クリッカーゲームも体験させていただいたが、このゲームは人間の社会技能訓練などにも十分応用のできるものだと感じた。またDolphins Pacificを訪れ、様々なことを学ばせていただけたらと思う。

夜はDolphins Pacificで働いている3人の方と食事を一緒にできた。3人のお話を聞かせていただくと、それぞれが自分の夢を持っており、かっこいい人たちばかりであった。このような出会いができたのは、非常に大きな収穫であり、今後もつながりを持っていけたらと思う。

6) 澤田幸嗣君のレポートより

今回の研修において自分が非常に興味を持っていたことの1つがドルフィンパシフィックでの体験である。もともとイルカ介在活動を研究対象として考えていたわけではなかった。しかし、自分の周りでイルカ介在活動をテーマにした研究をしていた人が何人かいたこともあったし、それについて話をする機会も割とあったのでここで行われている活動には最初から興味があった。香川の施設との違いや環境面での違いなど、見てみたいことが多くあった。とはいえ、香川の施設も数えるほどしか行ったことはなく、活動そのものもビデオで見たことがある程度だったので、自分自身が体験したいというのが一番だった。

実際に行ってみてまず驚いたのが水の違いだった。日本の瀬戸内海と比べるほうが間違ってい

るといわれても仕方ないことなのだが、本当に水がきれいだった。イルカが住む環境である以上はある程度以上の水深が必要であろうが、それにも関わらず、天気がよければ水底が見えるほどであった。その水の透明度だけでも十分人の心をつかんでしまうのである。透明度が高い水では、当然イルカたちの動きをよく見ることができるわけだし、現に自分たちが見学しているときは非常によく見えた（午後のセッションでは豪雨のせいではほとんど見えなかったが…）。また、特筆すべきは水だけではない。ロックアイランド独特の環境を利用した施設の設置についてもとても驚いた。イルカだけでなく、自然環境そのものを体感できる部分も施設の一部のように組み込むことで、パラオの自然も同時に体感できたように思う。イルカと触れ合うことによる変化だけが介入活動ではない、と同期の友人と話しているときに聞いたことがあったが、それも正直に一理あると感じた。単にイルカと触れ合うなら水族館のステージでもいいのだから。しかしそうではなく、まるでカウンセリングルームのように日常とは隔離された、特別な環境におかれることからすでにイルカ介入活動が始まっているのではないだろうか。プログラムだけが体験しに来た方に影響を与えるわけではなく、その環境すべてが刺激になるのだと感じた。

7) 塩野由乃さんのレポートより

4日目 アイランドツアーに参加。また船酔いするんじゃないか（前日のように）という心配から朝は気持ちが重かった。でも前日早めに寝たかいいがあってか、自然を満喫することができた。ミルキーウェイ、ロングビーチ、ジェリーフィッシュレイク、シュノーケリングとパラオの大自然を体感でき、昨日の苦い思い出もまろい経験か…と納得することができたと思う。それぞれの場所を移動している間にたくさんの島があったが、どれも不思議な形をしていて見ていて飽きなかった。珊瑚でできていることや、下が削れているのも特徴的だし、木が生えてこんもりしている感じが動物の形に見えたりと、自然が生み出した不思議な形に見入った。ロングビーチでは潮が引いていきどンドン道が開けていく感じが面白かったし、ジェリーフィッシュレイクではクラゲに圧倒された。異様なほどのクラゲの大群に神秘を通り越してしまい、言葉が出ない感じだった。日本では海にクラゲだと刺されるというイメージしかないが、恐いとか気持ち悪いという感じよりは、なぜこんなにもたくさんのクラゲがここに大量にいるのかということが不思議でならなかった。

そして最後のシュノーケリングは本当に楽しかった。海に入った途端足元にはサンゴ、前後左右には色んな種類の魚が間近に泳いでいて、ずっと泳いでいたい気分だった。魚の方が自分に向かって泳いでくるなんていうこともなかなかないので、本当に素晴らしかった。

夜はM1全員でコロール市内にくりだし、買い物をして食事を食べた。みんなそれぞれに疲れが見えたが、とても充実した4日だったので話題が尽きず、楽しかった。帰りのタクシーで痛い目にあったことさえ除けば、最終日は自分を浄化できた最高の一日だった。

8) 田中和美さんのレポートより

ドルフィンズパシフィックのイルカツアー まず、移動の船で圧倒されました。初めて船に乗っ

て大自然の中をすごいスピードで目的地まで行きました。世界最大の施設にいて、そしてトレーナーを経験できて、すごく感動しました。イルカを見ていて、人間と同じだなと感じました。ほめて伸ばす、できることから少しずつ、これは、子どもを育てる上で共通していると思いました。こんなところで、「オペラント条件付け」という言葉を耳にしたこともびっくりしました。

私は、実際イルカに拍手をしてもらいました。上手にサインが伝わるのか心配でしたが、私のサインにきちんと反応してくれてとてもうれしかったです。今回はとても短い時間でしたが、今後じっくり勉強してみたいと強く感じました。

カヤックツアー 当初にはないプランでしたが、カヤックツアーに参加してみたの感想は、参加してよかったと思いました。パラオの大自然を目の当たりにして、感動しっぱなしでした。午前中、カヤックに乗ってマングローブを見たり、ゼロ戦を見たり、大自然の中で、めったに見えないという国鳥が見えたりと、とても貴重な体験をしました。また、午後からは、ストーンマナーを実際に見たり、最後には、珊瑚礁の中でのシュノーケリングを体験しました。こんな自然を実際に目にすることができたことに感動しました。

ロングビーチ 潮が引いたら島と島がつながるというロングビーチに行きました。残念ながら実際にみることはできませんでしたが、こんな魅力的な自然が多いパラオはすごいと思いました。この自然が守られ、多くの人を魅了するパラオに改めて感動しました。

パラオ合宿を終えて パラオの大自然で丸4日間を過ごして、慌しい生活から開放され、とても癒されました。こんな貴重な体験をさせていただいたことに対し深く感謝します。

私がパラオの町の人々を見ていて感じたことの中に、「笑顔」が素敵だということがありました。にこっとすれば、にこっと返してくれて、手を振ったら笑顔で手を振ってくれて、とてもうれしい気持ちになりました。日本では、最近なかなか見れない光景だなとおもいました。笑顔は、人を幸せにするものだということを感じました。

パラオの大自然が、この先ずっと残され、多くの人を魅了して欲しいと思います。今回、初めてパラオに行って本当に良かったと思いました。一生の思い出になることは間違いありません。本当に多くの貴重な体験ができて良かったと思います。機会があればもう一度パラオに行きたいと思える国でした。

9) 牧野祥子さんのレポートより

ドルフィンパシフィックにて一日トレーナー体験 クリッカーゲームでは動物役を体験したが、思っていた以上に言語を使えないことの難しさを痛感した。思わず「こうかな？」と相手の望んでいる行動を確かめたくなった。特に、2つの行動を同時に形成させるプロセスが難しく感じた。私自身も足と手を同時に動かしたので、どちらの行動に強化されているのかわからず、ひたすらどっちも動かしていた。おいどんさんが言っていたように、2つの行動を組み合わせる場合、まず一つの行動に対して強化づけを行い、形成された後、もう一つの行動を強化することが大事である。非言語で教える際には、まずは一つずつ提示していくことが重要であることがわかった。

ジェリーフィッシュレイク、ダイビング ジェリーフィッシュレイクでは、1・2匹が見えたときには綺麗だと思ったが、どんどん増えていき、何もしなくても体に触れるぐらいになったときには少し味が悪かった。慣れるまでは触れるたびに思わず悲鳴を上げてしまった。クラゲがふわふわ浮いている中に人間が入ってきて、クラゲは騒がしいと思っているんじゃないかな？とふと思った。そう思ってからは、クラゲとちょっと仲良くなろうと思い、手で少し触れてみたり一緒にふわふわ浮いてみたりした。そうするとちょっと可愛く思えた。

最後のダイビングでは、本当に水が澄んでいて綺麗だった。さらに、ナポレオンもみることができて、どんどん潜りたいと思うようになっていった。4日までは救命胴衣をはずしたことがなかったが、あまりの綺麗さに思わず潜り方を教わって潜ってみたいと思うようになった。それまでは潜ることに怖さを感じていたが、そのうち怖さよりも、魚や珊瑚礁を近くでみたいという気持ちの方が強くなっていた。私の中では、パラオに来て一番のアドベンチャーだったように思う。潜ってみると、水面からみている景色とはまた違った景色が広がっていて、空の色や魚の色も全然違ってみえた。時間も忘れてひたすら潜っていた。その後もしばらく余韻に浸っていて、飛行機に乗っていても海の中にいるときのように揺られている気分だった。

引用文献

- 地球の歩き方(編)(2007). リゾート319パラオ
- Fletcher, T.B., & Hinkle, J.S. (2002). Adventure based counseling: An innovation in counseling. *Journal of Counseling and Development*, **80**, 277-285.
- Fuji, M., & Watson, W. (2006). Environmental enrichment and an approach to a problem behavior by application of DRI. *Soundings* **31**, (3), 24-26.
- 磯川禮子(2005). 戦いの記憶—パラオからの報告 毎日新聞 6月14日夕刊
- JICA(パラオ)ホームページ(2008). <http://www.jica.go.jp/palau/>
- 国立民族博物館(編)(2007). オセアニア—海の人類大移動— 昭和堂
- 小西浩嗣(2005). アドベンチャーカウンセリングと冒険教育について 帝塚山大学心のケアセンター紀要 **1**, 9-25.
- 小西浩嗣(2006). 帝塚山大学アドベンチャーカウンセリング体験会報告 帝塚山大学心のケアセンター紀要 **2**, 38-42.
- 小西浩嗣(2007). アドベンチャーカウンセリングの実践と転用について 帝塚山大学心理福祉学部紀要 **3**, 31-40.
- 松岡有希・小西浩嗣(2006). 基礎演習におけるアドベンチャーカウンセリングの実践 帝塚山大学心理福祉学部紀要 **2**, 79-95.
- 森岡純子(2006). パラオにおける戦前日本語教育とその影響 —戦前日本語教育を受けたパラオ人の聞き取り調査から—「立命館法学」別冊 山口幸二教授退職記念論集—ことばとそのひろがり(4)— 331-397.
- 宮川治樹(2005). 「障害児イルカ触れ合い活動」とその効果 女子体育 **47**(10), 56-59.
- 宮川治樹(2006). アニマル・セラピーって・・・? —動物介在活動総論として— 帝塚山大学心のケアセンター紀要 **1**, 39-44.
- パラオ政府観光局ホームページ(2008). <http://www.palau.or.jp/>

Schoel, J., Prouty, D., & Radcliff, P. (1989). *Islands of healing: A guide to adventure based counseling*. Hamilton, MA: Project Adventure. (伊藤稔監・プロジェクトアドベンチャー・ジャパン 訳 (1997). アドベンチャーグループカウンセリングの実践 みくに出版)

内田正洋 (2007). 祝星「ホクレア」号がやってきた。榎文庫

植田有香・宮川治樹 (2007). 発達障害児を持つ母親とイルカ触れ合い活動 —活動前後の母親のストレス変化— 日本応用心理学会第74回大会発表論文集p.114.

謝辞：本実習を行うにあたり、パラオ共和国元副大統領のサンドラ・ペイラントツジ女史、同国ドルフィンズ・パンフィックの田中裕之さん、キャロル・ンギライディスさん、根津美保さん他多数のスタッフの皆さん、本学教学支援課長の富井克行さんには大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。